針葉樹會報
通卷第七十六號

谷川行

P E N

六月十九日、朝四時半土合の驛に下り立つた時は、山裾まで擴がつてゐる狹霧が冷く頰を打つた。ゾロ〳〵下りるのは四五十人もゐる。その列の中に入つたまゝどうすると云ふ事なしに山の家に入る。物慣れた樣子で朝食を命じたり、仲の好いアベックが飯盒をつつきあつたりしてるが、自分は食事もまださり度くはなし、煙草をくゆらしてボンヤリしてゐたが仕樣事なしに出かける。

五時になればもう明るい。暫く來ない西黑澤の道はよくついてゐた。河原で食事をとつてるパーティが二組三組。それがこちらが休んだり食事をしたりすると先になり後になり、さう〳〵五段の瀧の上から雪が始まる所で一しよになる。これが今朝のトップだ。四人連、三人連、中學生らしい二人連、それに僕。その四人の連中などはピッケルを小脇にかゝへて實に颯爽としてゐて、薄汚い僕などが棒の折れを拾つて杖にしてるのを見て淺間しい奴と云はんばかりの顏付。

西黑澤を右に折れて岩のガラ〳〵した登りにかゝる。最後について行つたが一休みして煙草をふかしてる間にドン〳〵登つて行く。後から行つて見ると谷の中を眞直ぐに登つてるらしい。が右にハッキリ踏跡が見える。バス、フアインデンゲには苦勞をしてるからすぐ分る。その踏跡を上ると谷の中を登つて來る連中がまだ下をモゾ〳〵してる。待つてゝやつたら驚いて「何だ、こんな處に道があつたのか」なんて云つてる。これに懲りて今度は氣をつけて右手の凹みを上つて行つたらしいが後から見ると、雪を左に横切つて所々岩の出てる草付きへと徑がある。そこを東に登ると七時半マチガ澤の尾根に出る。飯を食つて休んでゐたが後の連中なか〳〵來ない。二十分許りして下の方の藪の中からウン〳〵云つて上つて來た。今度は大分兜を脫いだらしい。默つてニヤリ〳〵見てゐると大きな事を云つてるが僕が動かない中はなか〳〵動かない。仕方がないから今度は右にも左

にも間違ひのない尾根の上を先に立つて歩く。中學生の二人連は霧が深いからと引返したが八時半頃から時々霽れて青空が顔を出してはまたかげる。肩い廣場の下の雪田の斜面に來ると愈ピッケル氏連は情けない顔になつた。足場を切らうとか云つてながらキラ〳〵光るピッケルは丁度照り始めた太陽の下に燦然と輝きながら雪の上に横たはり、兩手をついて這ふ樣にして上つて來るのを見ては氣の毒になつた。九時少し過、トマの耳に着いた時はこの四人連のパーティ丈けで、もう一組の方は足を痛めた人が出來て歸つて行つた。スッカリ箔を落して今度はウキスキーやお煎餅を御馳走してくれる。谷川温泉に行くと云ふから霧が深かつたらおよしなさい、道が分らなくなつたら引返しなさい、天神峠への尾根でなければ下りてはいけませんよ、成る丈け右側の澤に下りてはいけませんと當り前の分つた樣な分らぬ樣な事を注意してやる。九時二十分先が急かれるから「それではお氣をつけなすつて」と云つて分れる。ツイ人夫の言葉が口に出る。「お氣をつけなすつて」は好かつたなと吾ながら思ふ。霧の中をスタ〳〵下りるとも うトマの耳は見えない。オキの耳を過ぎての下りは木の根、岩角で歩きにくい。

一ノ倉岳の登り にかゝると霧が晴れて來た。万太郎谷から仙之倉が白襟を合した樣に雪を殘して頭は雲で見えない。往年一ちやん、近ちやん、松さんの惡戰苦鬪の万太郎谷も此處から見ると割に他愛がない。天氣の好い日茂倉岳よりに下りたら先は見えないが相當行けそうに思はれた。東側湯檜曾川も少し明るくなつて白毛門、大クラ山、笠ケ岳、それから殘雪の多い朝日岳。

一之倉岳は十時半。短い草の山で氣持の好い處だ。三角點が見當らぬ中に過ぎてしまふ。そこから一ノ倉澤に向ふ草原に一面の雪田。北アルプスの藥師か東北の飯豊の樣な大きな山の草原に殘る雪田を思はして此處が一番氣に入つた。テントでも張つて二三日晴れた日を過すのも好さそうだ 時間が許せばユックリ書寢もしたい處だ。今度此處へ書寢に來ようかしら。そしたらその午睡たるや豪華なものだらう。何しろ汽車賃を使つて暇をつぶして、エネルギーを費消して此處までやつて來ての午睡なのだから。又草原の感じが柔かでアベックで來たら好きであらうなと思ふ。その効果は一〇〇パーセントで、どんな高價な犧牲を拂つても惜しくないであらうと想像される。

十一時茂倉岳。頂上三角點から少し下りて周りを笹に限られた草つ原にねころぶ。日が高く上つて暑さを覺えるとウト〳〵する。長さ二寸位の笹がフト身の丈以上の熊笹になつて——と云ふ幻覺を生ずる。自分の身體が一寸八分位になるとあの笹の中を分けて一日一二里歩いた、三里歩いたと喜んでるのを考へると一寸可笑しい。飛行機から山の上を虫の樣に、いや虫よりも小さく歩いてる人間のことを考へるとこんな氣がするのぢやあるまいか。

これから約三百米の下り。日が照つて暑い。自分の歩く廻りがずつと照りつけられてる樣だ。太陽を頂點として自分を中心に五百米の圓を描いてそれを底とする圓錐形の中に夏の陽光が充ち充ちてゐる。その外は雲に遮ぎられてしまふ。梅雨の季節でもあり愛用の蝙蝠傘をリュックサックにしのばせて來たが今は暑さの日傘となる。どうもこう暑くなると噂の高い松さんが羨しくなる。

時々誘つて見るのだが忙しいとか靴を修繕するとか言を左右に托して來ない所を見ると松さんは何か僕に對して一しよに來て心に咎めることがあるのに違ひないと口には出さないが心で思つてゐる。口には出さないが書いてしまつたからには仕方がない。松さんには僕と一しよに來られないのは決して疚しい所がないと云ふことを明かにしてをいて貰ひ度いと思つてゐる。それも口頭や私文書では困る。矢張りこの誌上で願ひ度い。(これも編輯者の爲に原稿を集めて上げたい老婆心の現はれで。)

茂倉の下りは日に照らされて長いと思つたが武能岳の登りは遠くで見た程のこともない。武能岳(一、七五九米 檜又の頭と僕の古い地圖に書込んである)の頂上はつまらぬ所だ。たゞ蓬峠へ一氣に見渡せる。頂きに大きな蛇がニョロ〳〵動いてゾッとする。一ちやん、武能澤を上つた時大きな蛇の皮を拾つたらう、あんな奴が、そら胴の廻りは――と云ふと孫さんめくが――四斗樽の呑口位。

峠の小舍まで眞すぐ下りる。蓬峠一時。二時半武能小屋に着いたら、森閑としてゐて呼んだら若い男が洗濯か何かしてゐたのが上つて來た。今朝土合で下りた連中でこちらへ來たのは一人もゐなかつたそうだ。こんな淺い山の中で今朝谷川岳で分れたきり一人も會はずノンビリ歩けるこのコースも惡くはないなと思つた。それに小舍の人の話では三月に六時頃小舍を出て蓬峠から谷川へ行き土合へ下りたのが二時半だつたと云ふから天氣の好い日のスキーツアーも愉快だらう。

五時、今朝から丁度十二時間歩いて土合驛のプラットホームで下り長岡行列車を待つ。谷あひも夕暮になると肌寒くなる。山々はまた雲をかぶつてゐる。此の分だと明日は雨だらう。

かにかくに過ぎ來し方や峰の雲

ナンガ・パルバート 一九三七年 (二)

大塚 武譯

○大破局(一四五頁―一四八頁)

六月十八日早朝第二天幕から第三天幕へ向つて、氷のテラスを越えて一隊が出發した。即ち私 Lufe) は食糧及び六月十六日ベース・キャンプに着いた郵便物とを持つて、五人の人夫を連れ更に第四天幕に向つて出た。

十五日以來好轉したこの素晴しい天氣で我々は調子良く前進した。そして十時頃第三天幕に到着、こゝでバルティス人は頭痛を訴へたので、私は彼等にお茶を作つて一時間休息して後來る樣命じて、私自身は一刻も早く隊員に會ひ、攻擊の狀態について知り度いと非常に緊張してゐたので單身上方へ急いだ。スマート中尉は十四日にヴィーンからの可成り長文の手紙を持つて來てくれた。この文中彼は「全ては第四天幕に於ては山頂攻擊の爲準備されてゐる。唯執拗な荒天の爲に第五天幕への移轉が妨まれてゐる」と書いてあつた。つまり天候の好轉が出來次第高所移動が即刻に實行される事になるだらう。こう云ふ氣持で私は一人第三天幕から第四天幕への平な斜面を登つて行つた。その間も絶えず私の眼はラキオット・ピークに向けられてゐた。と云ふのはその斜面に第五天幕或ひは更にそれを越えて、先登部隊のシェプールを

見付け樣と思つたからで。然し之は無駄であつた。正午頃私は最初の第四天幕地に到着した。然しこの場所が十日に撤收され上へ移された事は私も知つてゐた。そして更に上方の斜面へのシュプールがほのかに認められた。もう十五分間もすれば、いつも待ちこがれてゐる郵便物を友達に分配出來るのだと思つて、私は息を切らして高地に登つて行つた。

かくして今や私はチョンゲラピーク側の斜面により妨げられる事もなく、ラキオット・ピークへ續く尾根がすつかり見渡せる平な盆地に來た。然し四邊を支配してゐるのはおし迫る樣な靜寂さであつた。一本の消えゝゝになつたシュプールが果てしもなく東の方へ向つてつけられてゐた。(譯者註、之は十四日プェッファーが幕營地の東方主稜のシャルテに寫眞撮影の爲行つた時のシュプールであらう。)

何物も假借せぬ樣な重苦しさを明らかさを以て眞實が私の意識に迫つて來た。私の目の前には強大な力を持つた雪崩が直接に巨大な氷塊をのつけた長さ四〇〇米幅一五〇米の面を展開してゐた。天幕地からは、外には一本のシュプールも見當らなかつた。無數の一米立方もある氷塊が幕營地の上を埋めてゐるのみであつた。

その中に私の人夫達も登つて來た。そして確に十四日彼等が下山した時天幕地はここにあつたのだと證言した。

ずつと下の方に我々は數個のブリキ鑵を見付け、又それと共に上の平まで押し流された空のリュックを見出した。

三時間の搜索の後、私には埋沒した天幕を發掘するには我々の輕いピッケルではどう仕樣もない事がはつきりして來た。今や全てが強い動かす事の出來ない程度にまで諦められればならなくなつて來た。七人の全隊員と九人のシエルパ人の人夫は氷の破片の下に憩ふてゐるのに違ひないのだ。一人も脫走する事が出來なかつたに相違ない。でなければ、もう疾うに何か消息が私の下に屆いてゐる筈だから、十五日にはあの通り天候は良かつた だから、第五天幕へ一隊が向けられてゐる筈だ、して見ればこの不幸の起つたのは十四日から十五日へかけての夜でなければならない。

仰げば、氣高くも又人を否むが如くシルバーザッテルの斜面が頭上高く陽光を浴びて輝いてゐる。

が我が隊は最早滅びてしまつたのだ。(以下次號)

K K 生

出牛陽太郎の死

出牛陽太郎と書いただけでは針葉樹會の方々では知らない人の方が多いと思ふ。それ程彼は若い。然し往年の早大山岳部の棟梁として、冬季の穗高瀧谷に抗むだ男と言へば、大體御想像して頂けると思ふ。

彼は秩父の山里の產で、父は秩父のある銀行の頭取。卒業後は親爺の銀行に勤め秩父の町で無聊に苦しんでゐた。往年の意氣を失はぬ限り、山の銀行に燻つてゐる譯にも行かなかつた程元氣一杯だつた。その出牛が遂に病氣だと云ふ事を僕はこの二月頃故鄕の友人から知らせて貰つた。そして四月の中旬東京の病院で逝つた、病は胸だつたと知らせられ、驚き入つてしまつたのだ。四月十六日彼の骸は故鄕の山村で葬られ、永久に此の世からお別れし

てしまつた。過去の華なるに比して寂しすぎる死である。

出牛は私の家にも能く遊びに來た。「オイ」と言つたまゝノッソリと客間に蹲つて、チエリーを吸ふ男だつた。山の話をする相手も秩父の町では無かつたので、私と會ふとよく山の話が出た。酒を飲むことも嫌ではなかつた。悪口を言ふことも人に負けぬ。喧嘩と言へば氣も腕も人一倍强かつた。秩父の町の或る呑兵衛のならず者を、毆り倒して凱歌を擧げたこともある。これは出牛の秘話として殘る豪傑談だらう。

「大學を出ると何でも知つてると思ひやがつて、僻み根生の俗物がオッタヲ會議つて何だい、最も簡單に話して呉れと質問するよ」と彼は銀行の同僚を評した。大學出であることが僻まれて、つまらない質問を受ける事が度々あつたと言ふ。癪だから改造社の經濟學全集中の辭典を机の中に置いて、「これはその道の博士が書いたんだ。これ以上は簡單にしやうもない。俺に聞くよりも是の方が確かだ。サア讀んで呉れ！」と突き出したと言ふのも彼らしい態度だ。この話をした時は、二人で大笑ひしたものだが、その出牛既に失せ、又彼の勸めた銀行も大銀行に合併され、彼を僻んだ同僚も大學出の若い人々の多い新銀行に入らざるを得なくなつた。

出牛とは一緒に山に登つたことはない。然し彼とは共に飯盒の飯を食つた友程の友情を持ち合つてゐた。今年の正月共に野澤に行く筈だつたが駄目になり、彼とは永久に山行の機を失した。

だが僕は今、一人の佳き友を失つたと言ふ悲しみと共に、往年の冬期瀧谷攻擊の猛者出牛陽太郎と云ふ大きな存在の失せた暗い穴だけ見つめると言つた樣な空虛さに滿されるのである。

（一九三八・五・一五）

通信

○堀岡　清君より（六月五日附　編者宛）

在京會員の元氣如何、小生相變らず多忙にて手紙を書くのが嫌な位。先日小林君が遊びに來て呉れて久し振りに愉快だつた。その中に連れ立つて近ちやんの所へ遠征する積りです。此の夏は必ず休暇を貰ひ山へ入ります。それ丈を樂しみに毎日働いて居る樣なものです。會社勤めはどうです。會社の建物も君等の方は一號館でしようから良いでせう。皆さんによろしく。

○近藤恒雄君より（六月十日頃　中川君宛）

謹啓　其後御無沙汰して居ります、大兄然し御壯健で御過しの事と存じて居ります、私も例の通りです、然し流石煙の都、大牟田の空氣の悪い爲めか咽喉を痛めて數日病床に横はりましたが、全快致しました、子供も土地が代つたせいか五月は二兒とも連續床に就き最後に麻疹にかゝり、次男は急性氣管支加答兒を併發入院二週間、漸く昨日退院致しました、實際子供の病氣は一番つらひですよ、むしろ親が代つて病氣になり度い位です、然しどうやら長男の中耳炎以外は治りまして、一安心ですが、そろ〳〵大牟田名物の疫痢流行の徵あり、生水、生物一切嚴禁して備へて居ります、早や四ケ月餘になりましたので、體は可成り土地に馴れましたが、そろ〳〵梅雨の候です、とても其の氣持の悪い事東京の比ではありませんよ、通勤の途中、天氣の悪い日は瓦斯が道路一

杯立ち込めてをりますので、噎びますのでマスクをかけての通勤ですよ、然し確かに産業の第一線に立つて居ると云ふ感ぢがひし〳〵致します。

それに九州には國籍不明の飛行機や支那の飛行機が時々現はれますので可成り戰時日本の實感を味はされます、未だ大牟田の上空には現はれませんが突如警戒警報が鳴り渡り引續き空襲警報が響き渡つた時は一寸緊張致しましたよ。

それはそうさして本月末か來月初め頃私用の爲め上京せねばならぬ事になりました、日取は未だ決定致しませんがお目にかゝれるのが樂しみです、僅か四ケ月ですが東京の事が昔の樣な氣がして何んさなく淡い、そして緣の遠い東京の樣にも感ぢが致しますが、諸兄の顏を見ると又山への執着が蘇返りそうですよ。むしろ會はずにさも考へましたが、僕の感情が承知致しませんよ、どうしても會ひ度いで一杯です、其頃中川樣大阪出張ではありませんか、べんちやんや熊さんそして貴君には必ず會ひませうね、滯京日數は極く僅かですが一晩如水會館でゆつくり顏を見度いですよでは又、さよなら。

一橋山岳部昭和十二年度決算報告

會計委員　佐々木　誠

○收入	
前期繰越金	七七円〇八
本科會部費	五七〇〇
同追加金	四〇〇
豫科會部費	一〇〇〇
同追加豫算	三五〇〇
大學會計補助金	二五〇〇
部員費　本科	六〇〇〇
豫科	二七〇〇
入部金	五〇〇
合計	三九〇八
○支出	
器具費	二〇一五三
圖書費	三〇七〇
庶務費　日本山岳會費	六〇〇
部室火災保險料	四五〇
通信印刷費	一二八五
雜費	一二二六
歡迎登山補助	四九〇
劍澤合宿補助	三〇〇
德澤合宿補助	一〇〇
臨時費	五〇〇
次期繰越金	七二三四
合計	三九〇八

一橋山岳部昭和十三年度豫算

會計委員　船本文治

○收入	
前期繰越金	七二円三四

本科會部費		六二●〇〇
豫科會部費		一〇五●〇〇
同　追加豫算		三〇●〇〇
大學會計補助金		二〇●〇〇
部員費		四五●〇〇
	本科	三〇●〇〇
	豫科	三●〇〇
入部金		三六七●三四
合計		
○支出		
器具費		一五〇●〇〇
圖書費		三〇●〇〇
庶務費	日本山岳會費	六●〇〇
	部室火災保險料	四●五〇
	通信印刷費	二〇●〇〇
	修繕費	一四●五〇
	雜費	二〇●〇〇
登山補助		五〇●〇〇
次期繰越金		七二●三四
合計		三六七●三四

山岳部報告（六月）

記錄

(1)德澤小舍（六、一七—六、二二）佐々木誠、原鐵三郎

舊冬十二月奥又白谷に殘したピッケル等を取りに、又夏山を控えて德澤小舍の器具の整理と其他の準備交渉を兼ねて何處かに登るつもりで行つたが、天候に惠まれず、遂に頂上を踏まずに歸る事となつた。上高地迄の自動車道は連日の豪雨で破壞し澤渡迄しか行かず、德本峠を越えて入つた。梓川の川床はひどく荒れ、水量は多く、おまけに河童橋から上の橋は悉く落ちたので、渡渉どころでなく、德澤から直接奥又白谷に入れずに、上高地から迂回した。奥又白では野營したが翌朝から篠つく雨になり登頂を斷念して引返した。たゞ幸ひにも奥又白にのこした器具等は殆ど全部出てきた。原は德本越にて歸京。佐々木は中の湯の器具を整理する爲一日遲れて自動車にて松本へ出た。

日誌

○鷹野先輩來訪　六月一日(水)

久し振りに軍服の鷹野先輩が部室に突然來られたので、偶々來合はせた佐々木　原　岩崎　大塚　里見　木島　山田等が集まつて樂しい一夕を送つた。

○定期部員集會　六月三日(金)　於本科部室　出席者四名

○第一次合宿準備會　六月十日(金)　於本科部室

出席者（本科三名、豫科八名）

（豫科山岳部展覽會　六月十二日(日)

延期された記念祭の催物の一つとして、山岳部は山岳展覽會を開催した。杉浦前教授御出品の寫眞を始め、部員の寫眞、及びウインパーテント其他の器具を陳列して一般の觀覽に供した。豫科全部員の犧牲的努力によつて　今迄に稀な盛會であつた。

○第二次合宿準備會　六月二十四日(金)　於本科部室

出席者（本科五名、豫科七名）

○第三次合宿準備會　六月三十日（木）於豫科部室

出席者（本科五名、豫科十名）

記　錄　　林　俊介

○駒ヶ岳●鹿部温泉行

六月十九日（晴）函館＝大沼（八●〇一）—養狐場—銚子口（一〇●〇〇）—（戻）—地獄灣（一〇●三〇）—駒ヶ岳頂上（〇●五〇—一●三〇）—登山口（二●三〇）—銚子口（三●〇六）＝鹿部温泉（泊）

六月二十日（晴後曇）鹿部（八●五〇）＝銚子口（九●三〇）—大沼公園（一一●〇〇—大沼驛（三●〇七）＝函館

駒ヶ岳の頂上には鳳凰の岩峯似たのが聳えてゐる。道はさてもよい。噴煙は少いが、到る處に龜裂があり氣持が悪い。見晴は上々。

定例集會　七月六日（水）於如水會館

出席者（會員）中川　吉澤　村尾　吉澤松　山口　增山　小柳　柿原　新羅　望月（部員）佐々木　岩崎　原　船本　日江井　宮城　山田

神戸地方の水害の直後であつたので、話はそれに集中されてその地方の會員諸氏のことを心配する。夏山を目前にひかえて、學生諸君より今夏の計畫の詳細な説明があつた。

今晩は長らく病院生活をしてゐた船本、日江井の兩君が元氣で出席。尙森川君は湯河原に滯在中である。事變の爲か會員中から登山計畫が出されないのはいさゝか淋しい。

關西針葉樹會例會　七月二十日（水）午後六時半より

出席者　松木　太田　森　岡田　中島　黑田　小谷部

最初は例の如く野村ビルの如水會支部に集合。ナニワ亭なる料理屋で危しげな支那料理の數々さビールで氣紹をあげ、ソーダ水で熱を冷まして散會。ドンチャンはいくらか太つた樣です。何の爲でせうか？　例によつて大阪の連中は皆元氣です。尙先般の水害は本當に慘憺たるものがありましたが、幸ひ會員中では大した被害もなく無事でしたから御安心下さい。（小谷部）

會費納入方の御願ひ

本年度の會費御納め下さいますよう、何卒御配慮の程願ひ上げます。（年額在京會員六圓　地方會員三圓）

送金先　豐島區雜司ヶ谷六ノ一一二二　新羅二郎宛

編輯後記

時正に夏山のシーズン酣はで御座居ます。只今現役連中は豫定の如く穗高に、笠、北鎌に活躍中のことと思ひます。一般班及び涸澤合宿は無事夫々の目的を果して終了したとのことです。さて去る阪神地方の大水害では、その地方の會員諸氏の消息如何と大いに心配致しましたが、小谷部君の通知では皆樣大した被害もなかつた由、何卒御安心下さい。

新らしい會員名簿が出來上りましたから、一緒に御送り致します。（T・M）